

## 不安と心配からの解放

2006. 7. 18 (火)  
ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

マタイの福音書 6章25節から27節

「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません、いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるので、あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。」

ピリピ人への手紙 4章4節から7節

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。あなたがたの寛大な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

ペテロの手紙・第一 5章7節

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

旧約聖書の福音書であるイザヤ書の中に、主なる神のみことばとして次のように書かれています。よく知られている箇所です。

イザヤ書 1章18節

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

ここで複数形になっていますが、単数形で読んでみるとびっくりするのではないのでしょうか。

主はすべての罪の赦しを提供しておられます。主はあらゆる過ち、また、わがままを赦すことが出来るだけではなく、赦したく、待っておいでになるのです。すなわち、「今までのことを忘れて、親しく交わりましょう」とイエス様は呼びかけておられるのです。

人間は許し合おうという気持ちを持つことができたとしても、なかなか忘れられません。何かあればまた思い出すのです。しかし主は、赦してくださるだけではなく、忘れてくださるのです。

同じくイザヤ書 43章 25節を読むと、次のように書き記されています。

イザヤ書 43章 25節

「わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。」

つまり、「忘れます。永久に…」と。

44章 22節

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。」

主は赦すお方です。

ヘブル書の著者も、同じ事実について次のように書き記したのです。

ヘブル人への手紙 10章 17節

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」

結局、一度も罪を犯さなかったようにされるのです。人間には決して考えられないし、想像できないことです。けれど義と認められることは、そういうことなのです。

あらゆる人間にとって、どうしても必要なことは、「変わらない喜びをもつ」ことです。今回も、ドイツまである夫婦が行きました。ご主人である兄弟は、学校の先生なのです。職業としてではなく、使命として、子どもたちのために祈ったのです。けれども、問題が起きました。他人の子どものために助けになりましたが、自分の子どものためには何も出来なかったのです。他人のために努力して祝福を経験しても、自分の子どものためには何も出来なかったことは大変辛いことです。けれども、ドイツから帰国するとき、姉妹は輝いた顔で言ったのです。「悩みながら喜ぶことができる！ これは初めて経験した」と。これがイエス様なのです。問題が解決されなくても関係ありません。イエス様の与えられる喜びとはそういうものなのです。

また、どうしても必要なことは、まことの平安を得ることです。つまり、心配から解放されることです。大部分の人間は心配します。その結果、頑張ります。頑張ることによって問題が解決されるのであれば、もっともっと頑張ってもらいたいのですが、これは違います。ただ疲れるだけです。

また、どうしても必要なことは、生きる希望をもつことです。前向きに生活をするようにできることになることです。現代人にとって最も大切なのは、不安と心配から解放されることではないでしょうか。

イエス様も、引用聖句の中で、はっきり命令なさったのです。「心配してはいけません」。これは主のご命令です。心配することによって何にもならないからです。どのような人々が不安と心配から解放されているかと言いますと、自分の過ち、罪、わがままはイエス様の流された血によって赦され、忘れられ、私は永久にまことの神によって受け入れられていると確信できる人です。

不安と心配は、確かに私たちの力を麻痺させてしまいます。その結果、人は疲れを感じたり、何でもないことをするのに、多くの時間と労力を費やしたり、神経を使い過ぎたりするのです。それは、仕事が私たちをダメにするのではなく、心配と不安が人間を損なうからではないでしょうか。

ダビデという王様は、三千年前に不安や心配の種をたくさん持っていたようです。彼の書いた詩篇を読むとわかります。けれど彼は解放されました。心配と不安から解放されたのです。どうしてでしょうか。彼の書いた詩篇40篇17節に次のように書かれています。非常にすばらしい告白です。

詩篇 40篇17節

**私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。**

正直な告白です。「私は悩む者」、たとえ王であっても、自分に仕える者たちが大勢いたとしても、「私は悩む者、貧しい者です。主よ。私を顧みてください。あなたは私の助け、私を助け出す方」と。

つまり問題をもつことが問題なのではなく、問題に対する態度、反応こそが、問題ではないでしょうか。このダビデのような態度を取ると、主こそ自分の助け手であられることを新たに経験することができます。

このダビデは、あらゆる不安や心配を、全て助け手である主に明け渡すことによって、解決することができたのです。明け渡す秘訣、ゆだねることができる秘訣とは、相手の力を知ることではないでしょうか。不可能なことが無い方と分かれば、安心して全てをゆだねることができます。イエス様はその当時も弟子たちに同じことを教えようと望んでおられたのです。すなわち、「わたしにとって不可能なことは無い。絶えずわたしを覚えなさい」。

福音書を読むと、いろいろな奇蹟について書かれています。あるときイエス様は、四千人の人々、それから五千人の人々に食物を与えられたとあります。ちょっと読んでみましょう。

マタイの福音書 14章13節から15節

**イエスはこのことを聞かれると、舟でそこを去り、自分だけで寂しい所に行かれた。すると、群衆がそれと聞いて、町々から、歩いてイエスのあとを追った。イエスは舟**

から上がられると、多くの群衆を見られ、彼らを深くあわれんで、彼らの病気を直された。夕方になったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここは寂しい所ですし、時刻ももう回っています。ですから群衆を解散させてください。そして村に行つてめいめいで食物を買うようにさせてください。」

これは弟子たちの祈りでした。

#### 16節から21節

しかし、イエスは言われた。「彼らが出かけて行く必要はありません。あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」しかし、弟子たちはイエスに言った。「ここには、パンが五つと魚が二匹よりほかありません。」すると、イエスは言われた。「それを、ここに持って来なさい。」そしてイエスは、群衆に命じて草の上になすわらせ、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、十二のかごにいっぱいあった。食べた者は、女と子どもを除いて、男五千人ほどであった。

女と子どもを数えると、おそらく何万人にもなったのではないのでしょうか。

もう一箇所、15章です。

#### 15章32節から36節

イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。彼らを空腹のままに帰らせたくありません。途中で動けなくなるといけないから。」そこで弟子たちは言った。「このへんぴな所で、こんなに大ぜいの人に、十分食べさせるほどたくさんパンが、どこから手にはいるでしょう。」すると、イエスは彼らに言われた。「どれぐらいパンがありますか。」彼らは言った。「七つです。それに、小さい魚が少しあります。」すると、イエスは群衆に、地面になすわらうように命じられた。それから、七つのパンと魚とを取り、感謝をささげてからそれを裂き、弟子たちに与えられた。そして、弟子たちは群衆に配った。

弟子たちは、配ることしか出来なかったのです。

#### 37節、38節

人々はみな、食べて満腹した。そして、パン切れの余りを取り集めると、七つのかごにいっぱいあった。食べた者は、女と子どもを除いて、男四千人であった。

とあります。

この二つの奇蹟を比較してみたいと思います。注意したいことは、五千人と四千人という数字の中には、女、子どもは含まれていません。男ばかりであったということです。

まず、五千人の男たちをご覧になったイエス様は、彼らが羊飼いのいない、迷える羊のような状態にいるのを、心からあわれみなさったのです。

他方、四千人の男をご覧になったとき、彼らが食べる物を何一つ持っていないことに、あわれみをもよおされていたのです。

五千人の場合は、弟子たちがイエス様の所にやって来て、五千人全員を帰らせてほしいとお願いしたのです。

けれど四千人の場合には、イエス様ご自身が、弟子たちに向かって彼らに「食べさせなさい」と言われたのです。弟子たちはこれに対して、「何もないのにどこから食べ物を持ってくるのですか」とイエス様に尋ねました。

イエス様は、詩篇80篇1節が預言している牧者として、羊飼いのいない五千人の羊の群れのような男たちの前に自らを現わしてくださったのです。そして四千人の場合は、  
詩篇 132篇15節

**わたしは豊かにシオンの食物を祝福し、その貧しい者をパンで満ち足らせよう。**

というみことばを成就するお方として、イエス様が自らを現わされたのです。

イエス様は確かにあわれんでくださいました。けれどもイエス様はどうして奇蹟をなされたかと言いますと、ご自身こそが約束された救い主であることを証明なさりたかったからです。

五千人の場合は十二のかごが余り、四千人の場合は七つのかごが余りました。

「十二」という数字は、主が人間を器としてお用いになるということを意味します。

「七」という数字は、神の完全さを表わす数字です。また、七つのかごが余ったということは、やがて来たるべき日に欠乏が無くなり、全ての者が満ち足りる、主の国が出現することを意味します。

五千人の奇蹟を成し終えたあと、イエス様はお一人で山に上られ、やがて山から下りて来られると、困っていた弟子たちを助けてくださいました。今も、イエス様は父の右に座しておられ、私たちのためにいつも、とりなしの祈りをしてくださいます。けれど、それだけではなく、やがてご自分の民を大いなる患難から救い出すために、再びおいでになります。

四千人の者に食物をお与えになったあと、イエス様はどこにも行かれないで、弟子たちとともにいてくださり、弟子たちにいろいろと教えてくださいました。そのとき弟子たちは、患難の中に入ることはありませんでした。それと同じように、来たるべき日にも、イエス様を知ることが海をおおう水のように地を満たし、全ての人が主によって教えられる、とあります。

イザヤ書の中で11章の9節を読むと、次のように書かれています。

イザヤ書 11章9節

**わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。**

と預言されています。

エレミヤも、同じ事実について次のように書いたのです。

エレミヤ書 31章34節

そのようにして、人々はもはや、『主を知れ。』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。— 主の御告げ。— わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

とあります。

今まで読んできた二つの奇蹟を通して分かることは、そこに人間の本当の姿が描き出されているということではないでしょうか。すなわち、彼らは羊飼いのいない迷える子羊と同じであり、羊飼いをもっていないために、まことの霊の糧をももっていないということです。

また、この二つの奇蹟を通して、イエス様が、欠けているものを満たすお方として、すなわち良い牧者として、また、天から来られた生きたパンとして、現われてくださったことをも読み取ることができます。

まず、良い牧者として、イエス様はご自分のいのちを、私たちのためにささげてくださいました。

ヨハネの福音書 10章11節

「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」

と書き記されています。

そして、天からのパンとして、イエス様はご自分を信じた者たちに永遠のいのちを与えるためにご自身をささげてくださったのです。

ヨハネ伝の6章を読んでみましょう。

ヨハネの福音書 6章29節

イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」

人間は信じようと思っても信じられません。イエス様は信仰の創始者と呼ばれています。もし、どなたか信じる事が出来たとすれば、これこそ主のなされたみわざそのものです。

30節から35節

そこで彼らはイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じるために、しるしとして何をしてくださいますか。どのようなことをなさいますか。私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『彼は彼らに天からパンを与えて食べさせた。』と書いてあるとおりです。」イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」そこで

彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」

イエス様は、ご自身の力をお現わしになり、そして弟子たちがこの偉大なる主に心から信頼すること、徹頭徹尾信頼すべきであることを、知らせてくださったのです。

イエス様は何千人もの人々に対して、弟子たちが見ている目の前で、食物をお与えになりました。そしてまたイエス様は、自然をもご自身に従わせることがお出来になることを明らかにしてくださったのです。弟子たちは、イエス様は何でもおできになる方と確信できるようになりました。

弟子たちが水の上で非常に困った状態に陥ったということは、イエス様の導きでした。彼らは、イエス様の一言によってその瞬間、荒れ狂っていた波が鎮まったというすばらしいイエス様の御力を体験したのです。嵐から静けさに。不安と恐怖からまことの平安に。絶望から主イエス様にあつての喜びに変わるのです。

イエス様の導きの目的は、ただ単に、弟子たちがイエス様の力と導きに信頼することだけでなく、イエス様の無限の可能性をも信頼することでした。イエス様にとって不可能なことはありません。イエス様は全知全能なるお方です。したがってイエス様にとって、奇蹟も当然のことであったということを、弟子たちは知るべきだったのです。

当時の人々のイエス様に対する判断とは、いったいどのようなものだったのでしょうか。マルコ伝8章を読むと、次のように書き記されています。

マルコの福音書 8章27節から30節

それから、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられた。その途中、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々はわたしをだれだと言っていますか。」彼らは答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます。」するとイエスは、彼らに尋ねられた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えてイエスに言った。「あなたはキリストです。」するとイエスは、自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められた。

とあります。

ある人々は、イエス様はバプテスマのヨハネだと言ったのです。つまり、主なる神が、バプテスマのヨハネをよみがえらせ、もう一度新しい使命をお与えになったのだと思ったのです。確かにイエス様は、ヨハネと全く同じように、罪に対しては厳しく戦われたのですが、それだけではなく、イエス様は罪を赦す権威をもっておられるお方です。

また、ある人々は、エリヤだと言いました。エリヤは、最も強い大胆な預言者でした。確かにイエス様も、人間を全く恐れなくて、大胆に来たるべき裁きについて、来たるべき神の国について話されたのです。けれどもイエス様こそ神の国の王そのものであります。

また、ある人々は、預言者の一人だといいました。すなわち、悔い改めを迫る預言者として、主なる神がイエス様を遣わされたのだと思ったのですが、イエス様は預言を与えたお方というよりも、「預言の成就そのもの」であられたのです。

そこで、イエス様は弟子たちに向かって直接尋ねられたのです。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」と。そのときペテロは弟子たちの代表者としてすかさず、「あなたは神の子キリストです」、「旧約聖書で約束された救い主です」とはっきり答えました。「あなたはメシヤであり、旧約聖書全体が約束しているそのお方にほかなりません。あなたは父なる神の完全なみこころを行なうお方であり、悪魔を滅ぼし、永遠のいのちを与えてくださるお方です。あなたのために旧約聖書が書かれています。あなたこそ世の救い主であり、来たるべき王の王です」と。

イエス様は当時の弟子たちだけではなく、私たちにも同じように問いかけてくださっているのではないのでしょうか。「あなたは、わたしをだれだと言いますか」と。

ほかの人が何と言うかではなく、あなた自身がこの問いに対して、何と答えるかが大切です。あなたはご自分の告白として、いかなる答えをするのでしょうか。また、これらのことを、ペテロと同じように信じたとしても、その信じたことをあなたが日々体験しているかどうかの問題です。ほかの人々が、あなたの日常生活を見て、主イエス様がいかなるお方であるか、おのずから分かるのでしょうか。

私はある集会の兄弟姉妹を見て、その結果として、「イエス様ありがとうございます。あなた様は素晴らしいお方です。私は礼拝せざるを得ません。なぜなら、兄弟姉妹はイエス様からの大いなる力をいただいていることを証しする器になっているからです」と。

ペテロの告白は、単なる頭の知識ではなく、本当に上からの啓示によるものでした。ペテロの告白は、教養や理性によっては、決して与えられないものであり、まさに上からの賜物にほかならなかったのです。ペテロはイエス様がいかなるお方であるかを悟るようになり、イエス様を喜んだのです。それは自分の思いではなく、この告白の土台はまさに、主のみわざでした。自分の思いではなく、上から与えられたものでした。

パウロも同じことを経験したのです。よく読むガラテヤ書1章12節に次のように書かれています。

ガラテヤ人への手紙 1章12節

**私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。**

イエス様は、主なる神のあなたに対する啓示そのものです。イエス様が「わたしは何々である」と言われたとき、それは単なる教えではなく、まさに主なる神の啓示そのものでした。

最後に、「わたしは何々である」と言われたイエス様のみことばを七つ、ヨハネ伝から取り出して、考えて終わりたいと思います。イエス様は次のように言われました。

ヨハネの福音書 14章1節

「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。…」

「わたしを理解せよ」と書いてありません。「わたしを信じなさい」。これこそが私たちに對する主のご命令であり、最も大切なことなのです。イエス様は、「道徳的に高い生活をしなさい。宗教家になりなさい。わたしの教えを勉強し、理解しなさい」と言われたのではなく、ただ、「わたしを信じなさい」と。けれど、イエス様を信じるとはいったいどういうことなのでしょう。

イエス様の言われた七つのみことばを通して、それを知ることができると思います。

\*まず第一番目。イエス様の証しです。

ヨハネの福音書 6章35節

「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」

ここで二回も、「決して、…ない」とあります。

51節

「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

いのちのパンとして、生けるパンとして、イエス様は、主なる神の贈り物をあなたに与え、永遠のいのちに至ることを心から望んでおられます。もうすでにイエス様のみもとに来ているのでしょうか。

信じることは、イエス様のみもとに行くことです。信じるとは、いのちのパンを食べることです。すなわちイエス様を自分のものにするということです。それによってのみ、心の飢え渴きは完全に満たされます。エレミヤは二千六百年前にそのことを経験しました。

エレミヤ書 15章16節前半

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

あなたの飢えと渴きは、満たされているのでしょうか。

満たされる秘訣は、イエス様のみもとに行きなさい。イエス様を信じなさい。イエス様を食べ、自分のものにしなさいということです。

\*第二番目、ヨハネ伝8章12節。ここでイエス様は、またご自身を明らかにしてくださいました。

ヨハネの福音書 8章12節

「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

イエス様は、世の光として、あなたを罪の闇から明るみに出るようにと招いておられます。そして、あなたが光の中にまことのいのちを見出すようにと呼びかけておられます。この個所によると、信じるとはイエス様に従うことです。

- ・私たちは、イエス様に従う者になっているでしょうか。
- ・私たちの歩みは、光の中の歩みでしょうか。
- ・私たちは、自分の考えや動機を人に知られたくないと思うのでしょうか。
- ・私たちは、本当にいのちの光を持っているでしょうか。

ダビデは、

詩篇 119篇105節

あなたのみことばは、私の足のともしび。私の道の光です。

と、告白したのです。

また、イエス様ははっきり言われました。

ヨハネの福音書 3章36節

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見る  
ことがなく、神の怒りがその上にとどまる。

意味は、永遠の滅びです。永遠のいのちを得ることは、すばらしい事実であり恵みです。けれども提供された恵みを拒むなら、永遠の滅びを経験しなくてはなりません。

\*第三番目のイエス様のみことばは、ヨハネ伝10章の9節です。

ヨハネの福音書 10章9節

「わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。」

イエス様は、単なる道しるべではなく、救いに至る門そのものです。この門を通る者、すなわち、門であられるイエス様を通る者は救われます。

ですから、

ヨハネの福音書 6章37節後半

「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」

信じることは、イエス様という門をくぐる（通る）ことです。くぐって入る者は救われます。まだイエス様のみもとに来ていないならば、今日それをしたくないと思いませんか。

イエス様だけが、父なる神に至る、ただ一つの門、一つの道です。イエス様なしに、まことの神、父なる神に至ろうとする者は、反対にあわれな悪魔の奴隷となってしまいます。救われることとは、イエス様によって受け入れられることなのです。

\*四番目のみことばは、14章の6節です。

14章6節

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

ただ、門なるイエス様をくぐって行く者だけが、真理に至るのであり、永遠のいのちを見出すのです。イエス様なしの道は偽りの道です。今こそ心の目を開いて、比類なきお方であるイエス様を受け入れましょう。

信じるとは、いったいどういうことなのでしょう。このみことばによると、イエス様を通るなら父のみもとに行くことになるのです。

初代教会の人々はみな、確信をもって宣べ伝えたのです。すなわち、使徒の働き 4章12節

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

と。

\*五番目のことばは、11章の25節。

ヨハネの福音書 11章25節

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

罪の赦しが、いのちに至る道を遮断してしまいましたが、この問題をイエス様が完全に解決してくださったので、「わたしは、よみがえりであり、いのちそのものです」と言うことがおできになったのです。

すなわち、イエス様を信じる信仰、そしてイエス様を心から受け入れることが、私たちが主なる神に、そして真のいのちへと至らせていただけるのです。信じることとは、このみことばによると、永遠のいのちをもつことです。死んでも生きるとは、永遠のいのちをもつことだからです。

本当に確信をもって平安に死ぬることは、素晴らしいことなのではないでしょうか。昨日ある青年に出会いました。彼の父親はもう十年前に召されたのです。医者は命懸けでいろいろなことをしたのですが、お父さんは頼んだのです。「先生。全部やめてください。逝か

せてください。行き先はもう決まっているから、逝かせてください」と。そういう生ける希望をもって召されたのです。全部イエス様の恵みではないでしょうか。

\*六番目のことばは、10章の11節です。

ヨハネの福音書 10章11節

「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」

14節

「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。」

イエス様だけが良い牧者です。そして、主イエス様は、「ほかのものは偽りであるゆえ、わたしを信じ、受け入れなさい」と私たち一人一人に迫っておられるのです。まことのいのち、完全な満ち、全き平安、本当の安全は、全てイエス様によってのみ与えられます。

信じることはイエス様のものになることであり、そしてイエス様のものになった人は、イエス様ご自身を知っているのです。すなわち彼らは、イエス様の流された血潮の「赦しの力」を経験することができ、全ては赦された、忘れられたと確信し、喜びの声を上げることができるのです。イエス様を信じることは、最も大切なことです。イエス様について多くのことを知ることもできませんが、そのような知識を得ることによって救われ得ません。

\*最後の第七番目のことばは、15章、まず1節です。

ヨハネの福音書 15章1節前半

「わたしはまことのぶどうの木である。」

5節

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」

本当の交わりをもって、初めてぶどうの木は豊かな実を結ぶのです。イエス様はぶどうの木であり、私たちはその枝です。

ここでは動かすことのできない事実について書かれています。枝は木とつながっていれば実を結びますが、つながっていなければ何をやってもむなしく、役に立たないということです。イエス様と結び付いていない人は、残る実を結ぶことはできません。イエス様との交わりをもっている人だけが、常に実を結んでいるのです。

私たちの人生は実りのあるものなのでしょうか。もしもそうでないならば、私たちは主と結び付いていないということの証明ではないのでしょうか。

「わたしを信じなさい」とイエス様は言われました。これこそが、イエス様の私たち一人一人に対する呼びかけです。

- ・イエス様を信じることは、いわゆる人間によって作られたキリスト教という宗教に、入ることを意味しているではありません。
- ・イエス様を信じることは、ある教会に籍を置くことでもないし、聖書知識を得ることでもありません。またより良い人間になろうと努力することでもありません。
- ・イエス様を信じることは、ありのままの状態、イエス様のみもとに行くことです。そしてイエス様を受け容れた者として、イエス様に従うことです。
- ・そしてイエス様を信じる者は、門であるイエス様をくぐる者であり、父のみもとに行く人です。そのような人々は、受け容れられ、永遠のいのちをもつ者となり、そしてイエス様ご自身を知る者となります。

イエス様を体験的に知るようになった人は、「イエス様から離れたくない。イエス様をよりよく知りたい」と思うようになります。

イエス様の内にとどまること。イエス様と一つになること。(そして木と枝のように。)これこそ、主が望んでおられることであり、私たちも望むことです。

まとめてみると、不安と心配からの解放とは、イエス様をいのちのパンとして、世の光として、救いに至る門として、道として、真理として、いのちとして、また、よみがえりとして、良い牧者として、まことのぶどうの木として知ることです。

このイエス様は先に読みましたように、はっきり言われたのです。「心配してはいけません」と。

パウロは、ローマの刑務所の中で同じことを言ったのです。「思い煩ってはいけません」。主は、背後で導いてくださいます。(…主は近いのです。)

ペテロの手紙・第一 5章7節

**あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。**

と、ペテロは、当時迫害された人々を励ますために、書き記したのです。

了